

令和 3 年 6 月 2 日現在

機関番号：33910

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23024

研究課題名(和文) 自己を知る方法 プラトン哲学における自己知の課題と可能性

研究課題名(英文) A Study of Self-Knowledge in Plato's Philosophy

研究代表者

三浦 太一 (MIURA, Taichi)

中部大学・人文学部・講師

研究者番号：60847531

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：古代ギリシア思想、特にプラトン哲学における自己知を解明する為の研究を行った。研究方針として、まずプラトンが見出した自己知に関する問題、また、自己知を欠いた問題のある状態を把握し、それら問題に対応した、いかなる自己知がありうるかをプラトン著作から示そうとした。この方針に基づき、『カルミデス』、『イオン』篇を分析することで、自己知の難しさとその欠如の実態を考察することを試み、更に『パイドロス』篇において、恋の狂気と共に哲学者が行っている自己把握のありかたを明らかにした。前者に関して、一本の論考の発表と一件の国際学会口頭発表を、後者に関しては、一本の論考の発表と一件の国内学会口頭発表を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自己が一体何者であるかという問いを、人間は常に持ち続けていると思われる。特に我々は、高度な知性を人間の最たる特徴としてきたものの、現代において、人間を超える知的能力の可能性をもつ人工知能と対面することになった。優れた知性を人間特有のものとはできなくなった今、私あるいは我々は何者かという問題は一層深刻なものとなっている。このような問題に対応する為に、プラトンが提示する自己知の問題と可能性を理解し、活用するという企図を、本研究は有している。具体的には、自己知そのものについての考察方法や、自己知を欠くことの問題、いかなる自己知ならば可能なのか、といった事柄を提示しようとしている。

研究成果の概要(英文)：In this study, I attempted to clarify the concept of self-knowledge in Plato's thought. First, I focused on the issues in obtaining that kind of knowledge and serious afflictions caused by the lack of self-awareness in Plato's "Charmides" and "Ion". Subsequently, with the intention of delineating a possible path to self-knowledge, I analyzed "Phaedrus". Regarding the former topic, I made a presentation about "Charmides" at an international conference ('Holistic Medicine In Plato's Charmides', 14th London Ancient Science Conference, 2020) and published a paper which analyses the lack of self-awareness in "Ion" ("Arena" edited by Chubu University, vol.22). Regarding the second topic in "Phaedrus", I presented a paper about the significance of madness of love for self-understanding (the 93th conference of the Philosophy department of Sophia University, 2020) and published a paper about the importance of self-examination through recollection for obtaining truth ("Arena", vol.23).

研究分野：哲学

キーワード：古代ギリシア哲学 プラトン 自己知

## 1. 研究開始当初の背景

本研究代表者は、プラトン哲学における、自己知の問題と可能性の解明を目的とした。この研究対象は、博士論文で研究テーマとした、プラトン『パイドン』篇における自己概念への分析から導かれたのものである。当博士論文では、一般的には魂論の書として読まれる『パイドン』を自己発見への勧告の書として読解することで、著作全体をより整合的に解釈できることを明らかにした。その発見の意味は、自己の本質を完全に知ることではなく、自己自身の中に知的な欲求があることに哲学的対話を通して気づくということである。

以上に述べたような内容の博士論文執筆の過程で、プラトン作品『カルミデス』では「自己知」の困難が特に論じられていることが問題として浮上した。加えて、『イオン』では、自己の状態への認識を欠いた、狂気の詩人や吟唱詩人の有様が詳細に描かれていることも考慮の対象となった。つまり、プラトンがより明示的に問題としているのは、自己概念そのものよりも、自己知の方法とその困難であり、それについて、テキストに基づき、より厳密に、かつ具体的に検証する必要性がでてきた。博士論文執筆当時の、第一指導教員であるロンドン大学キングスカレッジの Raphael Woolf は第一人称的な視点での自己吟味の困難をプラトンが自覚しているという主張を行っている。当博士論文では、第一人称的視点を含む主観的なアプローチと、対話を通じた客観的な吟味の両方が用いられていると主張しており、Woolf との議論を通じて、プラトンが考えていた自己知と自己吟味の可能性の問題を考慮しなければならないことが明らかとなった。

以上のような「自己知」という論題に対して、近年のプラトン研究の中には、『パイドロス』篇において、哲学者の「自己知」を示唆する内容があることを主張するものがある。同対話篇に自己知の内容が組み込まれているとする解釈が正しいとすれば、はたしてプラトンは、『イオン』や『カルミデス』で示した、自己知を欠いている状態の問題、さらに、自己知そのものの可能性の問題に対して、何らかの応答をなし得ているのだろうか。この疑問が、本研究開始の発端となった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、プラトンが見据えた自己知の困難と問題を踏まえて、プラトンがそれに対して何らかの応答をしているのか、また、応答をなしえているとしたら、いかなる仕方での自己知を示しているかを、見定めることにある。この中心的な目的を達成するために、自己知に関わるプラトン著作の一つ一つの内容を内的に検討しながら、そこで抽出された問題が、他の対話篇で解決され得るかどうかが検討する。具体的にはまず、前述した、『カルミデス』や『イオン』といった対話篇に自己知の問題を見定め、それに対する応答を『パイドロス』篇に探究する。加えて、『ソクラテスの弁明』、『アルキビアデス I』、『パイドン』、『国家』といった他の対話篇も考慮にいれ、プラトンが指摘する自己知の問題と可能性の両方を考察する。このように、複数の対話篇を、問題の提示と応答という観点から見直すことによって、プラトンの自己知についての理解をより広く、かつ統一的な視点で捉えることを、本研究は目指している。さらに、『カルミデス』や『アルキビアデス I』といった明示的に「自己知」を扱っている作品だけではなく、より幅広い作品を考察対象に組み入れることを試みる。これによって、自己知の問題に対する応答を広範囲に探索することによって、プラトン哲学における自己知に関する新しい知見を求めることも、目的の一つである。

本研究は、古典テキストを分析し、プラトン哲学における「自己知」に関わる内容を、できるだけ明らかに、そして整合的に抽出することが第一の目的である。ただし、その一方で、われわれはいま、人間と同等の知的機能の可能性をもった人工知能の出現を目前としており、「われわれ人間」は一体何者か、ということを考えざるを得ない状況下にある。プラトンの作品において「自己知」を考察する過程では、「自己」がまず人間であるという重大な要素がある。そのため、「自己知」を考える結果として、人間の本質的な特徴が浮き彫りとなり、現代のわれわれが直面する「われわれは何者か」という問いに対して、何らかの貢献をするものが見いだされると思われる。

## 3. 研究の方法

2. 「研究の目的」に述べたような方針に基づき、複数の対話篇をギリシア語テキストから分析する。ただしその際に、まずはそれぞれの作品を一つずつ、その文脈を押さえたうえで読解し、作品そのものの内容と意図を明らかにする。この作業を経た上で、「自己知」に関連する内容を抽出するというのが基本的な方法である。古典テキストを読解するという作業に付きまとうことではあるが、書かれた内容を理解する過程において、文法上、内容上、また、校訂上の問題が夥しく現われてくる。伝統的な注釈書だけでなく、近年に出版された諸論文も検討しながら、テキスト解釈上の問題について考慮しつつ、内容理解を進めていく。そのため具体的な方法としては一つ一つの作品の整合的解釈をまずは目指すことになる。その結果得られた、自己知に関

連する概念理解が、他の注釈、諸々の論文に対してどのような位置取りをとるか、また、その解釈が何か新しいものを付け加えているかどうかを検討する。

具体的には、まず『カルミデス』、『イオン』などのテキスト全体を読解、分析し、自己知にまつわる問題と、自己知の欠如が起こす状態を明らかにする。この問題を見定めた上で、『パイドロス』など、自己知あるいは自己の本性への把握を示唆していると思われるテキストを解釈する。自己知に関する、これらの両面の内容を明らかにすることで、プラトンの見解を、より広い視点から見通すことを目指す。

#### 4. 研究成果

以上のテーマに関して、2019年度から2020年度にかけて、二件の口頭発表を行い、二本の論考を発表した。このうち、一件の口頭発表については、英国ロンドンで開催された、古代の科学をテーマとする国際学会において英語で口頭発表された。具体的な内訳は以下のようになる。

2019年度:(口頭発表)『Holistic Medicine in Plato's *Charmides*』(14<sup>th</sup> London Ancient Science Conference at the Institute of Classical Studies, Senate House, University of London, 2020)。(論考)『狂気の伝達 プラトン『イオン』篇における詩人と吟誦詩人、そして聴衆』、『アリーナ』第22号, 中部大学編, 277-290頁, 2019年。

2020年度:(口頭発表)『プラトン『パイドロス』における狂気の意義』, 上智大学哲学会 第93回大会, 2020年。(論考)『記憶と記録 プラトン『パイドロス』における「書かれた言葉」への批判から』, 『アリーナ』第23号, 中部大学編, 498-502頁。

2019年度の口頭発表では、『カルミデス』篇での自己知を理解するために、対話の全体に影響を及ぼすと思われる導入部の内容を分析した。同対話篇では、自己知とはいかなる知なのか議論され、その有用性の問題も提示される。その導入箇所では、人間の魂は身体に対して、頭が目に、身体が頭に対してそうであるように、「全体」であるという興味深い表現が用いられる。そして、人間の身体を治療するためには、まず身体に対して「全体」である魂を治療しなければならないという医学観が示される。ここでの身体と魂の関係解釈には様々な議論があるが、当該発表では、それを踏まえつつ、魂は、文字通りに身体を部分とした全体ではなく、身体の全体の状態に対して原因となり、さらに、魂は身体と魂の両方の状態に対して直接的な影響をもたらすという解釈を示した。それにより、人間が自らの全体的な状態を把握するに際し、身体よりも、むしろ魂の状態を適切に把握する必要があるという示唆を見出した。同年度の論考では、『イオン』篇を分析した。この作品では、当時のギリシア社会で知識人として扱われていた詩人が、自分の作品についての知や主体性をもたず、理性を欠いたまま、神にとりつかれ狂気の状態にある。その狂気は、詩人の作品の朗誦を仕事とする吟唱詩人や、作品の最終的な受容者である聴衆にも伝わってしまう。この狂気の伝達の連鎖において、神以外には理知をもつ者は誰もいない。それにもかかわらず、聴衆が、作品を何らかの知の源とみなし、詩人達を知者とみなす限り、自己もその中に含む一連の狂気な状態についての把握を欠くことになる。そして、吟唱詩人であるイオンという人物を通じて、自己の状態に対する無理解が引き起こす問題を確認し、自己知を欠くことの深刻さを明らかにした。

2020年度は『パイドロス』篇を中心に扱い、口頭発表では、哲学者が恋(エロース)の狂気に取り憑かれ、美しい少年への恋を通じて、自らの本性を把握することの重要性を示した。同対話篇でも『イオン』と同様、知や自らの作品に対する主体性を欠いた詩人達は、神的な狂気に取り憑かれているとされる。哲学者と詩人達との対比により、哲学者に特有の自己把握の仕方を明らかにした。論考では、『パイドロス』後半部での弁論術についての議論、そして、書かれた言葉に対する批判を読解した。この読解を通じて、哲学者がなすべきことは、文字によって記録された書物を重大視しすぎることなく、他者への恋をきっかけにして、自らの魂がかつて見た真の美や善の記憶に注目し、それら真の存在に接近することである、という重要な主張を読み取った。

以上の研究成果により、『イオン』篇からは自己知の喪失の問題を取り出し、また、『カルミデス』篇からは、自己知の困難を理解するための議論の方針を確認した。『パイドロス』篇からは、自己把握は、哲学者が恋の狂気に取り憑かれ、その結果として自らの本性を見出すという、限定された場合に可能であることが見いだされた。現状の研究成果からは、自己知は、単独での反省ではなく、狂気をも伴った他者との関わりによって獲得されうるという見通しが得られた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 三浦太一	4. 巻 第22号
2. 論文標題 狂気の伝達 プラトン『イオン』篇における詩人と吟誦詩人、そして聴衆	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アリーナ	6. 最初と最後の頁 277-290
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦太一	4. 巻 第23号
2. 論文標題 記憶と記録 プラトン『パイドロス』における「書かれた言葉」への批判から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アリーナ	6. 最初と最後の頁 498-502
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Taichi Miura
2. 発表標題 Holistic Medicine In Plato's Charmides
3. 学会等名 14th London Ancient Science Conference（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三浦太一
2. 発表標題 プラトン『パイドロス』における狂気の意義
3. 学会等名 上智大学哲学会 第93回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------